# 田舎のクマと都会のシカ【某推進キャラ擬人化？】

リュウカスキセイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
田舎のクマと都会のシカ【某推進キャラ擬人化？】

【Ｎコード】
Ｎ１５８６Ｔ

【作者名】
リュウカスキセイ

【あらすじ】
就活を終えた大学生の僕（鹿村）のもとに、田舎から『デジタル音痴』の古い物好きな熊田おじさんが遊びに来た。マイペースで変わり者のおじさんに振り回されつつ、僕はおじさんに東京の観光案内をする。しかし、いつもとおじさんの調子が若干違うのが気になって……。
基本ギャグ、ちょっぴりお涙ちょうだいな、
ほのぼの地デジ化推進小説。

**（前書き）**

擬人化というほど設定関係ありませんw
黄色いレオタードではなく、メガネにリクルートスーツ姿のインテリ気取りな『鹿村（シカちゃん）』が主人公。
（熊田さんの元ネタも知ってるとなお楽しめます。）

ギャグ初心者ですがよろしくお願いしますー

田舎のクマと都会のシカ

（この話は某地デジ対策促進キャラクターとは関係ありません。多分）

二〇一〇年三月末の時点で、携帯電話の普及率は九〇パーセント以上だと聞いた。契約数は人口を上回る数らしい。ほとんどの日本人――小学生から老人まで幅広い層――が携帯を持っているにも関わらず、あの人は未だに携帯もインターネットも使ったことが無い。

おかげで連絡がなかなかとれなくて大変だ。

就職活動も終わった三月。

実家の隣に住んでいた熊田おじさんが、会いたいと先週突然電話をしてきた。おじさんは家族そろってお世話になっていた人で、一年に二度、正月と盆のときだけ会っていたが、彼から電話をもらうのは初めてだった。

熊田さんはとにかく昔のものが好きで、歴史やアンティーク雑貨をこよなく愛していた。そして重度の『デジタル音痴』だった。だから僕の家にあった古い柱時計は直せても、デジタル式の時計は時間のセットすらできなかった。

今日、あの人は新幹線に乗って東京へ来ることになっている。品川駅内の時計台の前で僕はスーツ姿であの人を待っているのだが、約束の時間になってもなかなかあの人は現れない。

「おかしいな、時計台の前で集合だって約束したのに」
あの人のことだ、きっと迷子になっているのだろう。僕はそう思ってメガネをかけ、南改札の近くによってみた。

すると、あの人の後ろ姿が遠くに見えた。
ああっ！　３Ｄテレビ体験コーナーでメガネを覗いている！　しかもがっつり膝立ちして！
あの人は（いつも通り）着流しに下駄という時代も季節も間違った格好をしているので、近くを通りかかる人達は不審そうにあのひとを見ている。そりゃあそうだよなあ、一人だけ時代が違うよ。
「熊田さん！」
恥を忍んで呼んでも、周りの喧騒に紛れて声は届かない。しかし改札の中に入るのは面倒だ。仕方ない。

口に指をくわえると、ぴゅい、ぴゅい、ぴゅい、と三回ほど口笛を吹いた。昔、あの人と遊ぶ時に良く使っていた合図だ。
痛い、痛い！　周りの人の目線が痛い！　早く気付いて！

熊田さんは僕の口笛に気付いたらしく、振り向いて僕を探した。
「熊田さん！　こっちですよ！」
熊田さんは振り返って僕を見ると、「よう」といった感じに手を上げると、またテレビに目を向けた。いやいやいや、おかしいでしょ、それ！　気付いたんなら早く来て下さいよ！

やっと改札に来た熊田さんは、僕を見ると開口一番に言った。
「いやあ、最近はすごい技術があるもんだねえ」
「いまどき３Ｄなんて珍しくないですよ。っていうか、それよりも僕に言うことがあるでしょう？　折角の再会だっていうのに」
「そうだったな、すまんすまん。いやあ、お前が相変わらず元気そうで良かった」

熊田さんの顔は正月に会った時より痩せていた。少し黒い肌は健在で、凛々しい眉や良く見るとつぶらな瞳も変わっていない。
この人も、もうすぐ四〇歳か。時が経つのは早い。
「まったく。あなたも相変わらずですね」
「体以外はな」
「……さ、まずはどこに行きますか？　以前電話で言っていた東京タワーでも行きますか？」
「それは夜にしよう。夜の方が綺麗だろ」
「いや、でも、昼の方が色々と見えて綺麗ですよ。それに、なんだか夜に男二人で行くのも……」
「いいじゃないか、別に」
「良くないです！」
そのあとずっと話しあって、結局東京タワーには間をとって夕方に行くことにした。

それまでは、渋谷や新宿などを見たいのだという。その願いをかなえるため、品川駅から山手線に乗ることになった。Ｓｕｉｃａにチャージをし（熊田さんはキップを買って）改札を通る。
「最近はすごいなあ。そのカードで色々できるんだろう。買い物もできるんだって？」
「ええ。最近はコンビニや自販機に限らず、家電量販店などの店でも使えるようになりました。あ……３Ｄテレビはまた今度覗いてくださいね」
そう牽制しつつ、僕は熊田さんを山手線のホームに案内した。

休日の山手線ホームは思ったよりも空いていた。ほどなくして電車が滑りこんできた。
「丁度いいタイミングだったな」
「いえ、山手線は本数が多いのですぐに来るものなんです」
渋谷方面に向かう外回りの電車に乗って、吊革に掴まる。ここで

も視線が痛い。みんな見るな、熊田さんは大正時代の人じゃない！
「シカちゃん、これは何回りだ？」
「外回りです。品川を起点に新宿方面に向かうのが外回りです。その逆が内回り。地図で見た時に、時計周りになるのが外回りです」
「ほおー、さずがシカちゃん、相変わらず物知りだね」
「……それはいいですが、『シカちゃん』はやめて下さい」
熊田さんは、ははは、と笑った。そんな漫画のような笑い方久しぶりに見ましたよ。
「それにしても、スーツも眼鏡も似合ってるなあ。本当、立派になったもんだ」
「熊田さんのリクエストで着てるんですから、しっかり見といて下さいよ。本来ならもうリクルートスーツなんて着なかったはずなんですから」
「一度でいいからシカちゃんのスーツ姿が見たくてねえ。ワガママ言ってすまなかったな、ははは」
「……だから『シカちゃん』は」
「おお、今気付いたが、電車の中にテレビがあるんだな！　はー、これなら長く乗っても退屈しないな」
「……山手線に長時間乗ることなんて滅多にないと思いますがね」

駅に停まるたびに、乗客が増えていく。僕と熊田さんは混んできた車内で話を続ける。
「しっかし、シカちゃんももう就職か」
「まだあと一年間は大学生ですよ」
「いや、それにしても二十二年、早いなあ。最初にお前に会ったのは俺がまだ一八歳の頃だもんな。生まれたてのお前は本当に可愛かったなあ。俺がオムツ替えてやったこともあるんだぞ。それから……」
「もう、オムツの話は何度も聞きました。僕の小さい頃の話、始めると長くなるんだから勘弁して下さいよ」

「ん？　そうか？　じゃあ今日はこのくらいにしてやるか」
おや、いつもより諦めがいい。

電車が渋谷駅に着き、人混みをどうにか掻き分けて駅を進み、改札を出ると、熊田さんは辺りをキョロキョロと見渡した。どうせ、あれを探しているのだろう。
「ハチ公なら、こっちですよ」
「な、なんでわかったんだ？　まさか、最近の技術で人の心を読める機械があるとか言わないよな」
「そんなもんあったらとっくに日本政府は崩壊しています。あなたとも産まれた時からの付き合いです、それくらいは検討がつきますよ」

ハチ公や１０９、東急ハンズなどを見て回った。移動している時も、店内に入った時も、熊田さんは渋谷の若者の視線を奪っていた。どこからか携帯電話のカメラのシャッター音も聞こえた。勘弁してくれ、このままじゃ都市伝説になりかねない。
熊田さんはそんなことお構いなし、といった感じで、高くそびえるビル群に目を奪われていた。
サイゼリアで昼ご飯を食べることにした。メニュー表のミラノ風ドリアを見て、熊田さんは驚いていた。
「物価の下落が恐ろしいことになってないか？」
「いいえ、これは企業努力だそうですよ。ぎりぎりまで値段を下げているんです。その代わり、味はそこまでこだわっていないそうで……」
「へー、なんでも知ってるんだなあ」
「……ただのテレビの受け売りですよ」
熊田さんと僕はミラノ風ドリアを頼み、僕はそこに半熟卵を追加した。ドリアが運ばれてくると、熊田さんは「思ったよりしっかりしてるなあ」と感心しながら食べ始めた。

「うん、うまい。これを三百円で食べられるのか……時代は変わったんだなあ」
着流しに下駄にドリア。なんともミスマッチな組み合わせに思わずニヤリとしたが、すぐに顔を戻した。

サイゼリアを出たのち、新宿に向かうことになった。
渋谷駅に再び向かい、山手線に乗ることに。券売機の前でキップを買おうとする熊田さんに提案をした。
「熊田さん、折角の機会だからｓｕｉｃａを買ってみてはいかがですか」
「え、でも、静岡でも使えるのか」
「前まではｔｏｉｋａというカードでないといけなかったのですが、今ではｓｕｉｃａでも大丈夫なんですよ」
「はあー、そうなのか」
「そこの券売機で買うことができます」
熊田さんを券売機の前に連れて行き、一つずつ手順を教えた。
「あ、れ、動かないぞ」
「……どうして熊田さんの指には反応しないんでしょう」
デジタル音痴、というより、もはやデジタルに熊田さんが嫌われているように思える。

どうにかｓｕｉｃａを買い、チャージの仕方も教えた。
「ほー、なんか可愛いペンギンがいるなあ。なんだこいつは」
「ｓｕｉｃａのペンギンですね。さかざきちはるという絵本作家がデザインしたものだそうです。グッズも売ってますよ」
「ほー、良く知ってるなあ。お前は持ってるのか。ぬいぐるみとか」
「……持ってるわけないじゃないですか」
手帳なら持ってるけど。

新宿に着くと、熊田さんは「アルタ前に行きたい」と言いだした。

新宿に初めて来た人でそう言う人は多いんだよな。そしてアルタのビルに入って意外な狭さに驚く、というのが定番だ。あくまで僕の解釈だけど。
「いいですよ。行きましょう。ついでに歌舞伎町も見ていきますか。多分今の時間だと対して面白くないんじゃないかと思いますが」
「おお、いいねえ。……残念だなあ、泊まりだったら夜に行ったんだが」
「……そんなお金ないでしょう」
「ははは、冗談、冗談」
熊田さんはそう言うと、袖から出した扇子で顔をあおいだ。嘘がバレバレですよ。

新宿のアルタ前や、歌舞伎町をめぐった。熊田さんはまたもキョロキョロとあたりを見渡している。
「雑誌で見たが、アゲ嬢というのがいるらしいな。アゲハ蝶とは関係あるのか」
「昼間には居ないと思いますよ。それから、アゲハ蝶はそのアゲ嬢とは直接関連があるのかはわかりませんが、『小悪魔アゲハ』という雑誌は刊行されているので、テーマやモチーフとしては関係あるかと」
「なるほどなあ。いやあ、一度生で見てみたかったなあ」
「……見てどうするんですか。奥さんにチクリますよ」
「あっ、汚いぞ！　これだから携帯を持っていると怖いんだよな」
「いまや日本中の九割の人間が携帯を持っているんですよ。あなたが持っていないのが悪いんです」
熊田さんは「ちぇっ」と、まるで子どものように悔しがった。

今度は新宿の西口へ向かった。
熊田さんは案の定、ビッグカメラに興味を示した。店内に入り、大型テレビなどを見ながら、渋い顔で僕に耳打ちする。

「もう少ししたら、今のテレビが映らなくなるんだろ？」
「ええ、地デジに移行しますから」
「今のうちにその、地デジが映るテレビを買わないとなあ。今から品定めしようかと。折角機械に詳しいシカちゃんがいるしな」
「でも熊田さんに、新しいテレビの操作方法がわかるとは思えないのですが」
「うっ、確かに自信は無いな……」
「いちいちテレビを買い替えなくても、今使ってるテレビに、地デジチューナーを付けるだけでも地デジが見られるんですよ」
「なに、そうなのか！　それは良かった。それくらいなら、家内も俺がいなくなったあとで出来るだろう」
「……はい？」
「おっと……余計なこと言っちまったな。じゃあ、今日はテレビはいいか。そろそろメインイベント、東京タワーに行くことにしよう。楽しみだなあ。なんせ二十年ぶりだからな」
熊田さんは何かを誤魔化すように、立て続けに話し続けながら、店の外へと向かった。

いなくなったあと、で？

いまいち心に引っかかるが、熊田さんのことだ、いちいち気にするだけ取り越し苦労だろう。多分。

新宿駅から中央線に乗り、東京駅に向かった。
「東京駅からどうやって行くんだ？」
「僕が以前行ったことがあるルートだと、東京駅の丸の内南口前のバス停に『等々力操車所前行き』のバスがあるんですが、それに乗り、『東京タワー駅』で降ります」
「へー。前に行ったのは、誰と一緒に行ったんだ」
「……一人で行ったんですよ。暇だったんで」

中央線は今日も混んでいる。
すぐ右に居る熊田さんを見ると、窓の外を一生懸命見ている。
「ここからは、スカイツリーは見えないんだな」
「スカイツリーは総武線の錦糸町駅付近で見えますよ。もっと東の方にあるんです」
「東京タワーから、スカイツリーって見えるのか？」
「多分現在なら見えるでしょう。長さももう、六〇〇メートルを超していますから」
スカイツリーは知っているのか。

東京駅に着き、バスに乗ると、熊田さんは窓の外をじっと見ていた。
「すっかり変っちまったなあ」
「まるでもともと住んでいたみたいな言い方ですね」
「あれ……覚えてないのか」
「えっ」
「ちょっとの間だけ、俺は東京に出てたんだぞ。お前がまだ三歳ぐらいのころにな。まあ、半年ぐらいで諦めて帰ってきたけどな。そうか、覚えてないのか。あの時はお前、すげえ泣いてたのになあ」

僕が泣いていた？
産まれてこのかた、僕は人前で泣くことが殆どなかった。しかしその僕が、熊田さんの前で泣いていたなんて。初めて聞いた。

「東京に来て、俺は真っ先に東京タワーに上ったんだ。初めてあの景色を見た時の興奮は忘れられないなあ。車も、家も、ビルも、何もかもが小さく見えて、ああ、俺もこんなにチンケな存在だったんだな、って鮮烈に思った」
「そうだったんですね。それは初めて聞きました」
「お前は、初めて東京タワーに上ったとき、何を思った？」

「……一番最初に、富士山を探しました」

東京の大学に来てから、本当はずっと地元が恋しかった。

何より、山が目に見えるところにない、と言うのが心細かった。

周りはビルばかりで、見える空も狭くて、窮屈だった。

デジタルな物……新しいものが大好きで、ついつい最新の機械に手を出し、詳しくなっていく一方で、熊田さんとカブトムシ取りをした森や、スイカを割った海辺、釣りをした川、そして子どもの頃良く遊んだ熊田さんの家の庭を恋しく思っていた。パソコンや携帯やスマートフォンがどんなに新しくなっても、地元への思いは変わらなかった。

「そうか……お前もまだ、東京に染まってるわけじゃ無かったんだな。デジタルなものいっぱい使って、俺の知らない事いっぱい知ってたから、てっきりもう……」

「ただのミーハーなんですよ、僕は。……あ、そろそろ着きますよ」

『東京タワー駅』に降りると、熊田さんはタワーを見上げて、「ほーっ！」と感嘆の声を上げた。

「いつ見てもでかいなあ！　スカイツリーがこれの二倍ぐらいあるんだろ？　かーっ、すごいねえ、本当に」

熊田さんは僕にいつもの笑顔を見せた。しかし、僕の回想の中に出てくる熊田さんよりも、目のもとで見ると、やはりやつれているように見えて、思わずメガネのゆがみを確認してしまった。

入場券を買い、僕と熊田さんはエレベーターに乗る列に並んだ。休日と言うこともあり、老若男女が大勢来ている。

「未だに来場者が減らないのはいつ来ても不思議ですね。もう立って何十年も経つというのに」

「逆だ。何十年も経ってるからこそ人が来るのさ」

「ああ、新しく産まれた子が大きくなって……？」
「そうだな、それもある。でも、みんなは多分、一度来ているからこそ来るんじゃないか」
「どうしてですか」
「景色は変わっていくからな。少しづつ。ここにはアナログの世界があるんだよ。電気信号とは違う、静かに流れる時の世界が」
「おやおや、なんだか格好つけたようなこと言いますね」
「なんだよ、悪いかよ」
「いいえ。別に」
エレベーターが開き、僕らも中に乗り込む。
ゆっくりと上がっていく。
展望台に着くと、熊田さんはぐるぐると窓際を歩きはじめた。
「落ち着きのない。どうしたんですか」
「……あった！」
熊田さんが指さしたのは、遠くに見える東京スカイツリーだった。
すでに他の観光客が写真をとるために集まり、その近辺は混雑していた。
「やっぱみんな、考えることは一緒だな」
「良かったですね、今日は綺麗に見えて」
「……ああ。死ぬ前に見れてよかった」

死ぬ前に？
「死ぬ前にって……どういうことですか」

「……すまんな、シカちゃん。今まで黙ってたんだが、俺ガンなんだ」

「そんな冗談、笑えませんよ」
「……これがなあ、冗談じゃないんだよ。あと余命3、4カ月ってとこらしい。……ははは、アナログ放送と共におれも消えるわけだ」

熊田さんの顔を見る。笑っていない。
「すまないな、シカちゃん。色々とワガママ聞いてもらってよ。お前のスーツ姿も見れたし、東京タワーにも上れたし、スカイツリーも見れたし。楽しかった」
「……何言ってるんですか、熊田さん。まだやってない事があるでしょう」
「ん？」
「スカイツリーはまだ完成してません。来年の春にようやく完成します。……それを待たずして死ぬなんてもったいないですよ」
「そうだな……もったいないよな……」
熊田さんの表情は晴れない。
急にそんなこと言われても、僕はどうしていいか分からない。僕は……。

「シカちゃん」
熊田さんはスカイツリーとは違う方向を指した。
そこには、夕日の中でシルエットとなっている富士山が見えた。
「スカイツリーもいいけど、やっぱり富士山が一番だな」
「……」
「俺は、富士山があればそれでいいや。俺は富士山を守るから、お前は、東京タワーやスカイツリーを、ずっと守ってくれ」
「なんですか、それ」
「この先、何十年も、何百年も、お前らのような若者が東京を守ってくれ。この、綺麗な夕日を、何十年も、何百年も見続けられるように」
「あのですね」

「俺がいなくなっても、夕日は綺麗なんだろうなあ。東京タワーも、スカイツリーも、富士山も、ずっと、綺麗だといいなあ」

熊田さんの目からは、涙があふれていた。
ガラス越しに広がるパノラマは、静かに音も立てず、夜へと変わっていく。車が血液のように街をめぐり、そして次第に明かりが街にともっていく。

気付いた時には、もう辺りは暗かった。
僕の頬はいつの間にか濡れていた。
「熊田さん。特別展望台、行きませんか。僕が奢りますから」
「……そうか。じゃあ、そうしようかな」

特別展望台のチケットを買い、僕らは特別展望台に上る。
周りには家族連れやカップルで賑わっていた。外国人も何人か見かけた。
「おおー……やっぱり違うな」
「特別、ですから。……あ、あれを見て下さい、熊田さん」
窓越しの眼下には、テールランプの赤い光が満ちた道路。その形は鋭角な頂点を持った三角形に見える。そう、ちょうど今僕らがいる東京タワーのように。
「あれ、良く見ると東京タワーに見えませんか」
「本当だな。形が似ている」
熊田さんはしみじみと呟いた。
「……空に昇っても、この東京タワーなら見えるんだろうな」
「そうです……ね。見えたらいいですね」
「生まれ変わったら俺、もっと機械に強くなりたいなあ。普通はこういうのをデジカメとかで撮るんだろ？」
「……良いんですよ。別に強くなんてならなくて。写真なんて撮らなくても、僕らには記憶できる大容量のメモリーが最初からあるんですから。あなただって、ずっと僕の幼いころの事を覚えてたでしょう。だから、生まれ変わる必要なんてないんです。生きて下さい

よ、もっと。あなたに見せたい風景がまだあるんです」

「……せめて、七月までは頑張ってみるか」

熊田さんの困ったような笑顔が、胸の奥をぎゅっと絞った。

七月二四日。

熊田さんはアナログ放送の終わったその日に亡くなった。

熊田さんの奥さんいわく、熊田さんは亡くなる直前まで、あの時買ったｓｕｉｃａと東京タワーのキーホルダーを大事にカバンに入れて持ち歩いていたらしい。Ｓｕｉｃａはあれ以来一度も使わなかったそうだ。

翌日、錦糸町の窓からスカイツリーを見上げ、僕は静かに祈った。

どうか天国まで、デジタル放送の電波が届きますように。

ＥＮＤ

地デジ化の準備はお早めに。

（シカは分かるがなんでクマ？　という方は『アナログマ』で検索してね！）

## （後書き）

あなたの家のテレビは、大丈夫ですか？

どなたでも感想などお待ちしてます！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1586t/

---

田舎のクマと都会のシカ【某推進キャラ擬人化？】

2011年5月10日00時40分発行